

県「絶滅種」カワバタモロコ

県内で絶滅したとされた日本固有の淡水魚「カワバタモロコ」の写真、県立博物館提供の生息が58年ぶりに確認された。県民からあった情報提供を元に、県職員と県立博物館の学芸員らが確認。同博物館が徳島大学院と共同で生態を調査し、28日に大阪で開かれる日本生態学会大会で発表する予定だという。

県内生息 58年ぶり確認

同博物館によると、「カワバタモロコ」は日本固有のコイ科の淡水魚で、本州西部や四国東部、九州北部の沼池や水路に生息する。体長は大きくても6センチ程度にしかならず、小動物や藻類を食べるという。生息状況の悪化などから、希少動物とされ、環境省版レッドデータブックや、多くの県で絶滅危惧種に指定されている。

県内では46年に石井町で生息が確認されたというのが唯一の情報だった。その後、当時の生息地付近からも姿を消し、01年に県がまとめた県版レッドデータブックでもすでに絶滅した「絶滅種」に指定された。県民からの情報は昨年8月に寄せられた。県東部の平野部の農業用水路で見つけたという。県職員らが生息を確認した後、同11月に同博物館と徳島大学院工学研究科が共同で生息や分布状況を調査し、「少なくとも100匹以上いる」という結論を出した。DNA分析などから、県内に古くから住みついた魚群の可能性が高い。コンクリート護岸ではなく、水草が生えているなど比較的自然が多い場所に多く生息しているという。



県立博物館など 28日、学会で生態を発表